

(別紙2)

## 論文審査の結果の要旨

氏名 かじおふみたけ  
梶尾 文武

本論は、三島由紀夫の小説を戦後文学史の展開の中に跡づけた論考である。小説言語を人生の実在性から切り離し、また言語が自己意識や世界観に従属することを避けるために、あえて「空疎」とも見える装飾過剰な文体を編み出して行った必然が追尋されている。

構成は五部からなる。第一部は初期作品、『花ざかりの森』『盗賊』を扱っている。語り手や登場人物が作中に登場する物語を模倣し、その理想の読者を演じようとする事実に着目し、こうしたよそおいのうちに出発した作者が、戦後文学の打ち出した「独創性」の概念にアンチ・テーゼを見出していく過程が追尋されている。

第二部は『仮面の告白』と『金閣寺』を扱っている。『仮面の告白』論では、「語る私」が「語られる私」を別様の他者として疎外していく様態に、自己の「不在」を表現しようとする志向が見定められている。『金閣寺』論では、主人公にとって自他の関係の構築が困難であること、また、「人生」から疎外されていることの要因として金閣の美が醸成されていく過程が分析され、こうした「不在の美」をあえて破砕してみせる行為に、この作品の「虚無」の本質が見定められている。いずれも自己の「空虚」を言葉で意図的に創り出そうとする三島文学の特質を具体的に明らかにしたものと注目される。

第三部は『潮騒』と『美徳のよろめき』を扱っている。『潮騒』論においては、文学的想像力や教養を忌避し、人間の実在にも内面にも還元し得ない「美」を構築しようとする点に三島の古典主義の特色が見定められている。『美徳のよろめき』論においては、ヒロインがロマンティズムに覚醒し、やがて幻滅していくその様相を通して、規範や制度への侵犯が禁忌として成り立ち難い戦後社会の様相が明らかにされている。「姦通小説」として持つこの作品の性格が、ロマネスクな心理小説、あるいはそれを渴望する同時代の文学状況への強い批評性を持っていた、という指摘は傾聴に値するものである。

第四部は『鏡子の家』と『美しい星』を扱っている。『鏡子の家』論においては、戦争体験を絶対視する戦中派と戦後派世代との対立を念頭に、そのいずれにも加担せぬ本作の特色が見出され、世界との一体感から疎外される様相に着目した作者の立ち位置が浮き彫りにされている。また、『美しい星』論では、核時代の狂気を、現実の再現あるいは否定ではなく、独自のSF形式によって表現しようとした意図が評価されている。

第五部は『近代能楽集』を題材に、三島が能楽に登場する人物のイメージの二重性に、西洋の対話劇とは異なる特色を見出した点が評価され、絶対的な他者の不在をあえて劇場的なスペクタクルを通して描いて見せた点に、『憂国』の独創性が評価されている。

このように本論は三島の小説における言葉の過剰性や日常的現実との非・対応に着目し、その意義を戦中世代と戦後派との断層、昭和三十年代のメタフィジック批評の流れや中間小説の流行、さらには60年安保や冷戦下の社会状況との関連において、表現史的に分析したものである。一部に表現が晦渋に傾くきらいもみられるが、三島由紀夫の表現の特質を戦後の社会状況、文学史の展開の中に位置づけ得た功績は高い評価に値する。

以上の点から本審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位に値するとの結論に達した。